

ユートピア文学における「島」の衰微

——ヨーロッパを中心に

論文要旨：

未知の島への憧れは昔からある。人々は長い間に様々な試みをやって理想な世界を追求する。特に大航海時代になると、ヨーロッパでは理想の島に関する作品はたくさん出ている。十五世紀から始まった大航海時代のヨーロッパ世界の新大陸発見とともに、ユートピア作品には島という表象が定着していた。アフリカのプレスタージョンの王国への探険熱がこの時代をもたらし、大衆の欲望をもう一回拡大した。十八世紀に入ると、島物語はまだ文学作品のなかで重要な役割を演じているが、ユートピア風の風刺の意味が薄くなっていった。科学の発展によって、大衆の好奇心も地理上の発見とともに消えていった。ユートピア島の建設について、多くの人が考えたが、建設図に止まり、最後まで実践できなかった。島の地理的な原因はもちろんあるが、それだけではない。ユートピア島の転換期になると、遠い島に「野蛮人」を発見した人は、自分の文明より「遅れている」島に対する軽蔑的な態度を持っていた。このような高慢な態度は人間の本性であるかもしれない、この部分こそ社会の正義を実現するためには最大な障害物である。ユートピア文学作品において、島という表象は重要な存在である。近現代になると、科学技術の進歩とともに、島はすでに神秘的な存在ではなくなり、作品の中にも島の姿が減っている。本論は主にアンドレーエの『クリスティアノポリス』、カンパネッラの『太陽の都』、メルシェ『2440年 確かなる夢』という三冊のユートピア作品を中心に、島という表象の衰微とともにユートピア文学の変容を探求する。カンパネッラとアンドレーエが生きていた十七世紀は、航海が盛んになった時代だけではなく、現代科学が始まって好調に発展していた時代でもある。そのため、この二つの島には、科学がとても重要な地位をもっている。それに対し、メルシェが夢見たユートピア社会は昔の黄金時代に置かれず、何百年後の未来にある。昔の島と比べれば、夢はさらにロマンの色彩を持っている。島と大陸の対比より、夢と現実の対比の意味は一層強くなった。島はただ違う場所を指しているが、夢は異なる時間、場所、次元などを全部指している。それに、夢は夢と現実両方とも密接に繋がっている。夢を通じ、ユートピア社会の構築は作者の意志によって、自由に変換できる。十八世紀から、人間はさまざまなユートピアの改革運動を試みたが、ほぼ失敗していた。このような挫折感から、人々はユートピア話に対するある種の幻滅感が生じていた。欲望が大きくなると、人間の不安感も著しくなっている。そのため、ユートピアを批判する声も高まっている。ユートピアが危険の思想であると学者たちは指摘していた。ユートピアの存続が難しくなっている今において、ユートピアとしての島も生命力を失っていく。しかし、前に述べた無感覚の現代において、ユートピアが表していた精神と「未知の島」への好奇心をいつで

も我々は持つべきである。島が消えるというより、むしろそれがユートピアと分離してただけであり、ほかの形になって新しい象徴になった。ユートピア島は豊富な意味を持っている。人間の夢見るところでもあり、自然との調和できる象徴でもあり、母胎のような安定な帰属でもある。現代において、作品の中の島が別の形になったが、島の表現する精神は変わらない。ユートピア島が本当に現代にあるなら、それは未来に到達できるかもしれない終点ではなく、いつでも帰れる穏やかな「家」である。現代になると、ユートピア島という表象は見えなくなったが、人類のすべての美しい憧れを載り、文学作品において重要な地位を持っている。